＜報　告＞

日本統治時代の台湾生活誌（XII）

柴　　公　也

（46）夢の海南島

林錦萬（1916 年生）嘉義第一公学校卒

私の先祖は福建省南部の漳州から 17 世紀の初め頃、渡台してきたそうです。なんでも、先祖の一人の林徳鏞は、康熙帝の時代に科挙の最終試験である殿試に状元（＊首席）で合格したとのことです。ですから、私の家は、代々読書人の家系として続いてきた訳です。

私の父は嘉義の漢学者で、廟に近所の子供たちを集めて書房の先生をしておりました。父は三年に一回大陸に渡っていたそうですが、今考えると科挙の試験を受けるためだったのでしょう。母は、台南州の白河の造り酒屋の娘で、台湾服を着て纏足をしておりました。両親とも、日本語は出来ませんでした。私は五男ですが、父が 47 歳の時の子供です。私が 5 歳の時、父は世を去ってしまいました。当時の嘉義は、既に水道や電気が通じ、中心街は舗装されておりました。

公学校に入る前に、近所の媽祖廟の一室を教室にした書房に一年ぐらい通いました。書房の先生は、西市場の本屋の主人でしたが、副業として書房で漢学を教えていたのです。先生は五十代で、ハイカラ頭に台湾服を着て靴を履いておりました。書房には、筆と墨を持っていって、紙に書いていました。『三字経』や『論語』を習いましたが、公学校に入学したので途中で止めてしまいました。当時は、まだ公学校に入る子供が少なくて、子供たちが媽祖廟の庭で遊んでいると、巡査が近寄って来て、「歳はいくつ？学校に行かないとだめだよ」と諭して勧誘していたものです。

嘉義第一公学校は男子だけの学校でした。校舎は、檜造りの平屋でしたが、床はコンクリートでした。立派な講堂もあり、一周二百メートルのトラックもありました。月謝は、30 銭ぐらいだったように覚えています。一銭でバナナが二本買えた時代ですから、決して安くはありませんでした。近所の男の子は八割方通っていましたが、女の子は二割ぐらいしか通っていなかったように思います。

一学年三組で、一組 40〜50 人でしたが、年齢は 7 歳から 13 歳までとまちまちでした。先生方は、内地人だけでなく台湾人の先生もいましたし、女の先生もおりまし

た。一年の時から台湾人の男の先生に日本語を習いましたが、台湾語を交えて教えてくれました。二学期頃には先生の言うことが解るようになりました。ただ、漢文の授業はありませんでした。三年生からは内地人の先生に教わりましたが、学校内では日本語を使うようにと言われました。ただ、台湾語を使っても罰せられることはなく、学校の外では依然として台湾語で話しておりました。

三年の頃、他のクラスの図体の大きな生徒が言うことを聞かないので、女の先生が泣いていたということがありました。5年と6年は内地人の男の先生でしたが、それほど厳しくはありませんでした。毎年、一人か二人落第していましたが、成績が非常に振るわないか、病気で長期間欠席していた生徒でした。

大正12年の4月に、当時摂政の宮であった昭和天皇が嘉義に巡幸に来られたことがありました。嘉義駅から大通りの両側に大勢の市民が奉迎に出ましたが、皆粛然と頭を下げ続けていたので、御姿を拝見することはできませんでした。私にとって、昭和天皇は日本で最も尊敬する人だったのです。

当時は、台湾服に裸足で通っておりました。五分刈の頭に徽章の付いた帽子を被っていましたが、夏には白いカバーを着けていました。弁当は在来米で、太刀魚の煮付けや塩漬けの魚、それと野菜や卵を詰めて持って行きました。カバンはなく風呂敷で、斜めに肩に掛けて通っておりました。

天長節などの式日には、校長先生が「教育勅語」の奉読を行っておりました。神社参拝はありませんでしたが、一年に一回、先生に引率されて嘉義の「孔子廟」に参拝していました。運動会や学芸会もありましたが、内地人の学校とは違って父兄はあまり参観には来ませんでした。

成績は一年から常にトップクラスでしたが、経済的に中学校へは進学できませんでした。それで、校長の推薦で嘉義の一番大きな内地人の商店に丁稚として住み込みで入りました。給料は一ヶ月5円でした。主人は山口の出身で、生地や洋服、高級雑貨や化粧品などを扱っていました。

番頭さんたちを始め、10人ほど店員がいましたが、台湾人は二人だけでした。苛められたりはしませんでしたが、言葉がおかしいと良く笑われました。ただ、私は嘉義の事情に詳しいので、内地人の店員には重宝がられました。食事は番頭さんたちが終わってから食べておりました。風呂も毎日入っていましたが、主人の家族が最初で丁稚たちが最後でした。嘉義市内では、台湾人と内地人の仲は別に悪くはありませんでした。

その頃（＊昭和6年）、甲子園の全国中等学校野球大会で全島代表の嘉義農林が準優勝して、街中が大騒ぎになったことがありました。選手たちは、幟の立ち並ぶ嘉義駅から学校まで大群衆の中を歩いてパレードしたのです。私も駅まで出迎えて拍手を送ったことは、今でも昨日のことのように覚えております。

五、六年ほど働いた後、橋梁を造る土木会社に移りました。給料は月 20 円ぐらいでした。社長には、息子が二人、娘が二人おりました。勤めて二年目のある日、奥さんから嘉義高女の三年生の次女との縁談を申し込まれました。私の仕事ぶりが認められて婿候補に挙げられたのでしょうが、私は公学校しか出ていませんし、釣り合いが取れないと思って断りました。事業が傾きかかっておりましたし、台湾人は馬鹿にされて差別されていた時代ですから、たとえ自分は良くても相手が可哀想だと思って諦めたのです。それで、仕事の段落が付いた時点で辞表を出しました。

次に、大日本製糖の季節工員になりました。一日 12 時間、砂糖の原液の分析をしておりました。日給制で一日一円でした。管理職は内地人で、一般の職員は台湾人でした。家は社宅でした。途中で、台南の警察官募集に応募しましたが、筆記試験は合格しました。面接試験では、日本語があまりに流暢なので驚かれました。ただ、身体検査の時、風邪を引いてしまったので受けられず、結局不合格になってしまいました。

その後、昭和 12 年に、嘉義で働いていた店の主人から今度高雄に支店を出すので、手伝ってくれないかと言われ、私より一つ下の若主人の手伝いをすることになりました。月給は 20〜30 円でした。店の最上階に部屋を与えられ、食事は三食女中さんに面倒見てもらいました。

店は、洋品が主力商品で、私は、販売、帳簿の記入、内地からの商品の原価計算などを担当し、時には外回りもしておりました。お客は内地人でしたが、店員はほとんどが台湾人でした。

当時、家内の弟が東京の大学を出て、高雄の州庁に勤めていました。家内は東京の三越に勤めていたのですが、辞めて高雄の私の勤めている洋品店に来たのです。家内は小学校しか出ていませんでしたが、家内の弟と懇意の市会議長が店のお得意だったので、その縁で店に入ったのです。

家内は、内地では良縁に恵まれなかったのだそうです。そのため、台湾に来ていたのですが、家内と知り合って三年目に、結婚することになりました。ただ、困ったのは戸籍の問題で、台湾と内地では制度が違っていましたので散々悩みました。結局、私が家内の戸籍に入ることになり、それ以来、私は戸籍上内地人になったわけです。家内の姓は「三好（みよし）」でしたが、終戦後内地に引き揚げてきてからは、戸籍はそのままで、姓だけは「林（はやし）」に戻しました。

結婚式は、金がなかったので高雄神社に御参りして、帰りに写真館で記念写真を撮っただけでした。家内は着物で髪は普通の髷、私は背広にネクタイを締めただけの形だけの結婚式でした。嘉義の私の母は来ましたが、家内の両親は亡くなっていましたので、家内の身内で来たのは弟だけでした。

その頃、昭和 14 年の二月に日本軍が占領した海南島に行っていた公学校の同級生に会いましたが、軍刀を提げて非常に羽振りが良さそうに見えました。訳を聞くと、

海南島に行って食堂を経営しているうちに、伝手を頼って海軍の物資を供給する仕事を始めて、それが図に当たったのだそうです。海南島には、既に台湾人が商売人や軍属として渡っていたのです。ただ、朝鮮人は、ほとんど見掛けませんでした。

それで、昭和15年に結婚すると直ぐ海南島に渡って、中心都市の海口でクリーニング屋を開業したのです。事前に下見をして、海口の事情を良く調査してから開業したので、商売は直ぐ軌道に乗りました。家内も働き、私の二歳下の弟夫婦も手伝いに来ていました。現地人の従業員は10人以上雇っていましたが、仕事の種類に応じて給料を払っておりました。従業員は通いでしたが、三食とも私の家で食事を調理して食べていましたから、休むことなく良く働いてくれました。

海南島では軍票が流通していましたが、商売は繁盛して毎月100円以上の収益がありました。海口は台湾と気候も似ていて直ぐ適応でき、現地の人たちも温和で、生活に困ることは別になく、内地人の妻も大変満足しておりました。

海口は、中心街は舗装されていて電気や水道も通っておりました。私の家は煉瓦造りの二階建ての洋館で、一階が店舗で二階が住宅でした。仕事上電話もあり、トイレは水洗で、風呂も内地人の妻のために後で据え付けました。海口の中心街には、二階建てや三階建ての洋館が立ち並び、内地人たちが住んでおりました。中心街は、高雄より近代的な印象を受けました。

海南島は、海軍が占領して軍政を布いていたので治安は良好でした。海口では、主に台湾語と同系の閩南語の方言が話されていましたので、自然に覚えて、商売に困るようなことはありませんでした。生活も安定してきて、長男に続いて次男も生まれました。息子が二人になったので10歳くらいの少女を子守として雇っておりました。

海口では、台湾人だからと言うことで馬鹿にされるようなことはありませんでした。もし日本が負けなかったら、ずっと住み続けていたいと思ったほど海口での生活は豊かで安定していたのです。

海南島には、日本の領事館もあるし、小学校もありました。内地人の商店も多数あり、クリーニング屋ももう一軒ありましたが、場所が違っていたのでトラブルになるようなことはありませんでした。客は内地人でしたが、周囲の現地の住民との関係も良好で、表面的には平和な日々が続いておりました。

海口の市場では、地べたに商品を並べて売っておりました。ただ、日本人が買い物をすると、現地の人よりも高い値段で買わされていました。別に民族的な反感からではなく、日本人は金持ちだから、現地の人より値段が高くなるのは当然だというものでした。

当時、台湾人には兵役がありませんでしたが、別に嬉しいことでも残念なことでもありませんでした。最初から台湾人には兵役がなかったのですから、考えても仕方のないことだと思っていたのです。でも、もし早くに志願兵の制度があったならば、自

分も志願していたかもしれません。

当時、自分は台湾人で差別されていましたから、内地人とは違うと思っていました。ただ、支那に復帰するとか日本から独立するとかなどは考えたこともありません。当時の私にとって、支那は先祖の出身地というだけで、もう自分とは関係のない国だと思っていたのです。

海口では戦争の影響が感じられず、空襲も一、二回あっただけです。それで、防空壕を掘ったり防空演習をしたりすることも、ほとんどありませんでした。物資も豊富で食料に困ることもなく、今考えても終戦まで平和で安定した夢のような生活を送っておりました。

敗戦の報に接した時は、負けたこと自体は悔しかったのですが、また、これで戦争が終わって、これからはもっと良くなるだろうという期待もありました。ただ、台湾が将来どうなるかについては考えておりませんでした。毎日の生活に追われて、考える暇がなかったのです。海南島では戦闘がなかったので、終戦後も現地人の態度が急変することはなく、危害を加えられたりすることもありませんでした。

終戦後は、学校に収容されていましたが、昭和 21 年 3 月の末に海口を離れました。私は、既に日本内地の妻の籍に入っていましたから、台湾に寄らずに直接和歌山の田辺に入港しました。田辺で、新円で一人当たり 1000 円支給されましたが、インフレで直ぐ使い果たしてしまいました。日本に来てからは、駐留軍のクリーニング屋で仕事をすることになりました。軍隊の仕事ですから毎月確実に儲かりました。

クリーニング屋を辞めてからは、ポップライス屋をしておりましたが、結局「おこし」を造ることに成功し、これが大当たりに当たって、子供を育てて大学に通わせることが出来ました。長男は、東大の医学部を出て博士号を取り、山梨医科大学の教授になりました。今は、事業を次男に譲り、悠々自適の毎日です。

（47）台湾から満洲へ

大柴道子（1925 年生）敷島高女；安東高女卒

私の父は、東京生まれで、東京帝大を出て三井物産に勤めていました。関東大震災の前年に台北支店長に栄転しています。母も東京生まれで、東京の女学校を出ています。

私は、建成小学校に入る前に、兄に付いて大正幼稚園に入り、三年間通いました。建成小学校は、一学年五クラスで、男組が二つ、女組が二つ、それと男女混合組が一つでした。私は、女組でしたが、一クラス 50 人くらいでした。

同じクラスに 5 人くらいの台湾人の生徒がいました。皆、医者などの裕福な家の娘で、身なりもきちんとしていて日本語は流暢でした。台湾人の生徒は、「林氏純慈」

のように姓に「氏」が付いていました。先生方は「林氏純慈」のようにフルネームで呼んでいましたが、友達同士では「純慈さん」のように個人名で呼んでいました。台湾人の生徒を苛めたり、差別したりすることはなく、仲良くしておりました。

先生方は全員内地人で、皆師範学校を出た優秀な先生方でした。先生方も台湾人の生徒を差別したりすることなく、公平に教えていました。

台北の家は、大正町という日本人街にありました。家は木造の平屋でしたが、池のある庭がありました。周りは、ほとんど内地人の家でしたが、所々裕福な台湾人の家もありました。当時の台北は、水道やガスが通っていて道路も舗装されていました。ただ、トイレは水洗ではありませんでした。

家には、沖縄の八重山から来た女中さんが住み込みで働いていました。他にも、洗濯や掃除をする台湾人のチャボラン（＊台湾語で「小母さん」の意）さんが通っていました。また、毎日台湾人の御用聞きが来ていましたので、母は家事の負担はありませんでしたが、日本人同士の付き合いがあって、よく出掛けておりました。外出する時は着物でしたが、夏は洋服でした。

台北では、日本人街に住んでいましたので、台湾人との接触は、級友とチャボランさんぐらいで、一般の台湾人とは交流はありませんでした。一度、台湾人の級友の家に遊びに行ったことがありました。級友のお父さんは、弁護士だったのですが、家は大きくて、生活様式は大分日本化しておりました。

建成小学校を卒業する時、父が満洲の新京（＊現在の長春）支店長に異動になったので、父に付いて新京に移りました。基隆から下関を経由して大連に上陸しましたが、4〜5日掛かったように記憶しています。三月の末頃に新京に着いたのですが、夜は氷点下10度くらいまで下がったので、南国の台湾から来た身には寒さが応えました。

ただ、家は煉瓦造りの一部三階建ての洋館でスチームが入っていたので、室内は台北の家よりも暖かく快適でした。家には、台北から付いてきた住み込みの女中さんの他に、通いの現地人の阿媽（＊女中）さんとボーイさんがいました。ですから、母は家事の負担がなく、日本人の奥さん同士との付き合いに明け暮れておりました。

四月から日本人の学校である敷島高等女学校に進む予定でしたが、父のミスで手続きに不備があって入れず、一年間高等科に通ってから翌年の四月に入学しました。

新京は、満洲国の首都でしたが、首都に定められてから五年くらいしか経っていませんでした。道路は、大変広くて舗装されていましたが、建物は整備の途上で、所々空き地が広がっていて、少し寂しい感じがしました。水道やガスは通っていて、トイレも水洗でしたからインフラは台北よりも近代的な感じがしました。

敷島高女は、一学年三組で、一組50人くらいでした。クラスに4〜5人、満洲人（＊漢族と満洲族）の級友がおりました。満洲人の級友は、台湾人とは違って、姓に「氏」は付きませんでした。皆さん、裕福な家の娘さんたちで、身なりもきちんとし

ていて、日本語も大変流暢でした。おそらく日本人の小学校に通っていたのでしょう。学校では、苛めたり差別することなく仲良く付き合っておりました。先生方も差別することなく公平に教えておりました。

先生方は、日本人でしたが、唯一人満洲人の女の先生がいて満洲語（＊北京語）を教えておりました。ただ、この先生は、授業中日本語は一切使わず満洲語だけで教えていたので、先生の言っていることが良く解らず苦労しました。

敷島高女の二年の二学期の時、父が満洲と朝鮮の国境沿いの街の安東（＊現在の丹東）の支店長に異動になったので、私も安東高等女学校に転校しました。

安東は、新京よりは小さな街でしたが、それでも水道やガスは通っており、トイレも水洗でスチームも完備していました。家も煉瓦造りの三階建ての洋館でした。安東でも、沖縄の女中さんと満洲人の阿媽さんとボーイさんがいましたので、母は家事の負担がなく優雅な生活を送っていました。

安東高女は、一学年二クラスで、一クラス 50 人のうち、四人ぐらいの満洲人と二人ぐらいの朝鮮人の生徒がおりました。満洲人の級友は漢族名でしたが、朝鮮人の級友は創氏改名をして日本名を名乗っておりました。ただ、学校の中では、民族の別なく仲良く付き合っておりました。

安東は、鴨緑江を隔てて対岸が朝鮮でした。日本の製品は朝鮮では税金が掛からず、安いので、裁縫の用具を買いに一キロほどの橋を渡って対岸の新義州に買い物に出掛けておりました。当時、満洲は外国のはずでしたが、内地人と朝鮮人はパスポートなしで往来していました。ただ、税関検査は、密輸防止のため厳格に行われておりました。

新京や安東では、日本人は別に威張っている感じはしませんでした。また、満洲人や朝鮮人から反感や敵意は感じられませんでした。日本人と満洲人や朝鮮人が街の中で喧嘩をしている姿や噂は見たことも聞いたこともありません。

女学校でも、内地と違って、工場に動員されたり地方に疎開したりすることなく、普通に授業を受けていました。卒業まで、モンペを穿くこともなくセーラー服にスカートで通っていました。冬もスカートでしたが、毛糸のレギンスを履いて綿入れの厚いコートを着ていました。

また、勉強だけではなく、バレーボール部に入って毎日夕方まで練習していました。時々対抗試合があって、奉天（＊現在の瀋陽）や大連に遠征していました。大連は、新京よりも発展していて大変賑わっておりました。ハルビンには、修学旅行で行きましたが、日本語の流暢なロシヤ人の娘さんが店員として働いておりました。

京城（＊現在のソウル）と平壌には、女学校の修学旅行で行きましたが、新京や安東の方が物資が豊富で裕福な感じを受けました。実際、新京の方が京城よりも広々として近代的な印象でした。

女学校では、運動会や学芸会があって、父母が来ていました。安東高女では、鴨緑江が凍ると、スケートによる遠足があって、有志が上流の方に向かって滑って行きました。授業の正課としてなぎなたがあって、稽古に励んでおりました。また、一度軍事演習があって、五発の実弾を撃ったことがあります。

満洲国の皇帝の行列には、二度ほど出会ったことがあります。ただ、通りの建物の窓は全部閉められて顔を上げることは出来ませんでした。皇帝が新京神社に参拝する時には、皆が奉迎に出て最敬礼しておりました。

祝日は、日の丸と満洲国の旗を並んで揚げて日本と満洲国の式日を祝っておりました。満洲国の式日には、まず日本の宮城の方角を向いて遥拝し、それから満洲国の宮殿の方角を向いて遥拝しておりました。次いで、君が代を歌ってから満洲国の国歌を満洲語で歌っていました。結局、満洲には五年間おりましたが、空襲もなく物資も豊富で全く平和で安定していて、戦争の影響は感じられませんでした。

昭和18年の三月に、父が東京の本社に異動になったので、卒業と同時に東京の牛込の父方の祖母の家に移りました。木造の平屋で、部屋は四つありました。ガスと水道は通っていましたが、トイレは汲み取りでした。家が手狭だったので、荻窪に移りました。やはり、木造の家で、五部屋ありました。水道とガスは通っていて風呂もありましたが、トイレは汲み取りでした。大きな通りは舗装されていましたが、横丁は砂利道でした。

冬は、こたつしか暖房はありませんでしたので、室内では、満洲よりもずっと寒くて震えておりました。女中も一人だけになりましたから、母も家事をこなさなければなりませんでした。

帰国して、一年半ぐらい実践女子専門学校（＊二年制）に通いました。昭和20年の四月に三井木船建造（株）に入社しました。一年ほど勤めて、陸軍を除隊した夫と見合いをし、21年の4月に結婚して日本での新たなスタートを切ったのです。

（48）基隆の街で

大浜基子（1925年生）基隆高女；台北師範女子演習科卒

私の両親は沖縄の石垣島の出身で、父は総督府の鉄道局に勤めておりました。妹三人がいましたが、家は基隆の鉄道官舎ですから、生活には余裕がありました。基隆は日本人の造った台湾の玄関の港町で、中心部には内地人が住み、その周囲に台湾人が住んでおりました。内地人と台湾人の住む場所は違っていましたが、関係は別に悪くありませんでした。基隆は電気や水道は既に通っており、道路も舗装されていて相当に近代化された街でした。

基隆の双葉小学校に入学しましたが、一学年4クラスで、男女別クラスでした。

校舎は煉瓦造りの堂々たる建物です。校内には歯科治療室や太陽灯浴室などが設置されていて、設備は充実しておりました。

同級生に顔碧秋という基隆一の資産家の娘がいて、豪壮な邸宅に住んでいましたが、何度か遊びに行ったことがあります。

6年に上がる時、父が転勤したので新竹小学校に転校しました。一学年三クラスで、男組と女組、それと男女混合のクラスがありました。

昭和13年4月、支那事変の翌年に新竹小学校を卒業して新竹高等女学校に入学しました。新竹高女は、一学年三クラスで、一クラス50人でした。一クラスに四～五人ほど台湾人がおりましたが、苛めたりせずに仲良く付き合っておりました。校舎はコンクリート造りの平屋でしたが、プールもあり、運動場が広かったのが印象的でした。

4年に上がる時、父の仕事の関係で基隆高女に転校しました。基隆高女は、一学年二クラスで、一クラス50人です。先生方は全員内地人でした。台湾人は一クラスに三～四人ぐらいしかおりませんでした。ただ、馬鹿にしたり苛めたりはせずに皆仲良く過ごしていました。校舎は、コンクリート造りの二階建てで堂々としたものでしたが、プールはありません。

昭和17年4月、基隆高女を卒業して、台湾総督府立台北第一師範学校女子演習科（＊二年制）に進学しました。校舎は男子部と一緒ですが、教室は離れておりました。女子演習科は、一クラスだけで40人ぐらいが在籍しています。支那からの留学生が二人いましたが、台湾人は一人だけでした。また、両親が沖縄の人は私一人だけでした。

ほとんど全員が台湾の女学校出身者で、内地の女学校を出た人はいなかったと思います。男子部の場合、内地でも募集していたので、内地出身者のクラスが台湾出身者のクラスとは別にありましたが、女子部の場合、内地での募集はしていなかったのです。

女子演習科は、入学金、授業料、寮費など一切官費で賄われておりました。毎月充分すぎるくらいの金額でしたので、卒業の時、余った分をまとめて頂いた記憶があります。

全寮制でしたので、全員寮生活でしたが、時間や規律が厳しく、軍隊式に朝と夕に点呼があり、食事も全員揃って一斉に取っておりました。

授業では、小学校で習う全科目の他に、教育学、心理学、教授法などを習いました。二年生の二学期には、付属の国民学校で教育実習を行いましたが、授業を受けながら付属の学校に通ったように思います。その点、現在の教員養成学部の出身者よりは、ずっと経験を積んで教壇に立てたと自負しています。

二年生の半ば頃から、授業に代って防空訓練や射撃訓練等が多くなるとともに、学

徒勤労動員として、市街各地の警備に当たることもありました。大雨の中を、台湾総督府前の広場で学徒隊の閲兵行進に参加したことは今でも忘れられません。

戦局が悪化してきた昭和十九年の三月、私は無事に師範学校を卒業し、母校の校長の招請で、双葉国民学校に訓導として赴任しました。初任給がいくらだったのかは覚えていませんが、内地人には外地手当てとして加俸があったので、内地の先生よりはずっと多いということは聞いていました。

給料は良かったのですが、戦時中なので物資が不足しており、店には商品がありません。それで、仕方なく闇で買ったり、物々交換で必要なものを手に入れたりしておりました。

赴任して間もなく学童疎開が始まりましたが、私は職場に残って、疎開できない生徒のために授業を行っていました。市内の目ぼしい学校の校舎には、部隊が駐屯していたので、授業は地域ごとに児童の家を借りて行っていました。

私の家では、母と基隆高女に通っていた妹と国民学校の妹二人が台中州の田中という村に疎開しておりました。父と私は、戦時下とはいえ、毎日通勤していましたが、空襲が始まり、戦況の不安が徐々に胸中をかすめるようになりました。安全だと思われていた母たちの疎開先でも、敵の機影を見るようになったのです。父は、疎開先でも基隆でも同じことだと、母と妹たちを連れ戻して来ました。

昭和20年に入ると、空襲は昼夜の別なく日ごとに激しさを増して来ます。警戒警報が出ると、私は昼夜を問わず、防空頭巾を被って救急袋を肩に掛け、学校へと飛んで行きました。

校長は、灯火管制下の暗い職員室で点呼を取り、全員の出欠を確かめていました。校長を始め、職員の最も大切な任務は、御真影をお守りすることです。御真影を安置する防空壕は避難用の防空壕とは別に、運動場に続く山の斜面に掘られておりました。学校は、講堂が爆撃で全壊したものの、他の校舎はほとんど無事でした。

私の家では、父が隣家の人と掘った壕が、家の直ぐ側の山の斜面にあって家族の避難場所となっておりました。母や妹が、父たちの掘った土や石ころを運ぶ作業を何日も続けて出来た壕でしたが、この壕のお蔭で戦争を切り抜けることができたのです。また家も、塀が破壊されただけで無事でした。家を失った沖縄の二家族が身を寄せ、狭いながらも三世帯の十二人が引揚げるまで、風雨を凌ぐのには充分でした。

台湾では、沖縄出身の人は、本土の人から遅れた小さな島から来た人たちというように軽く見られていたような気がします。ただ、私自身は女学校や師範学校で馬鹿にされたとか蔑視されたとかいうような体験はありません。

学校には朝鮮人はおらず、基隆市内にもいなかったように記憶しています。朝鮮は日本の一部だということは知っていましたが、全然関心がありませんでした。

昭和20年8月15日、ようやく終戦を迎えましたが、不安や苦労が終わったわけ

ではなく、新しい困難の始まりでした。父は、地元の台湾人の暴動を怖れていました。中国兵の上陸に伴う混乱も同様で、治安面の不安が何よりも大きかったのです。次に金銭面の心配でした。父と私の給料がストップされるのは必至でしたので、食糧難も考えられ、不安は際限なく拡がったのです。終戦の詔勅の放送があってからの数日は、人びとは家に籠もり、息を潜めて世の動きを窺がっていました。心配された暴動らしいものは、私たちの身辺ではありませんでした。

終戦の翌年の四月、私と直ぐ下の妹は、闇船に乗って先に石垣島に帰りました。両親と二人の妹は、六月頃に国の引揚船に乗って横須賀回りで石垣島に着きました。石垣島は昔のままで近代化が進まず、基隆とは格段の違いでした。道路は砂利道で、電気や水道は通っておらず、茅葺きの平屋が地面にへばりついているような街でした。今では、基隆から石垣島に来て 60 年以上が過ぎましたが、今でも私の故郷は基隆だと思っております。

（49）平埔族の歳月

東俊賢（1930 年生）台南商業；海軍航空技術廠

私の故郷は、台南州の南化郷です。元来、南化郷と隣接の玉井郷一帯（＊シラヤ語ではタパニーと呼ばれていた）から台南にかけては、台湾の先住民であるシラヤ族の大地でした。シラヤ族は、山地に住んでいる先住民の高砂族とは違って、平地に住んでいるので平埔族と呼ばれています。刺青や首狩りの習慣を持たず、オランダ人や漢族と混血して早くから開化したので、現在では漢族とほとんど区別が付かなくなってしまいました。私の両親は、このシラヤ族の末裔でした。

このシラヤ族の天地であった平和で長閑な村にも不幸な事件（＊漢族と平埔族による最大の抗日事件で、首謀者の余清芳がアジトとしていた台南の「西来庵廟」から「西来庵事件」と呼ばれているが、台湾では、主戦場の「タパニー」から「タパニー事件」と呼ばれている）がありました。子供の頃、事件の際に出来た家の米倉の焼け跡で、祖父は事件について語ってくれたのです。

1915 年の 7 月 9 日、巡査補の経歴の抗日民族主義者の余清芳は、日本の台湾統治に対する不満から自ら台湾の皇帝になることを夢見て、同志の羅俊や江定とともに「大明慈悲国」建国の旗印を掲げて蜂起しました。手始めに、隣接の高雄州の甲仙埔支庁と警察官の派出所や駐在所を襲って警察官など 64 名を殺害し、叛乱の火の手を挙げたのです。ちなみに、祖父は江定とは知り合いだったそうです。

余清芳は、根深い台湾人の迷信的な神仏信仰を巧みに煽動して神符を身に着ければ敵の弾丸には当たらないと信じさせ、最終的には二千人を超える参加者とともに玉井郷や南化郷一帯の派出所や駐在所を次々に襲撃して老若男女の別なく虐殺し、石油を

撒いて焼き払ったのでした。

この叛乱で、95 人が犠牲になりました。焼け死んだ内地人の警官のうちの一人は、妻が平埔族です。その孫は、たまたま私の同級生でした。決起後、余清芳らは山奥に立て籠もって頑強に抵抗したのですが、軍隊が動員されて 8 月 22 日に余清芳らが逮捕され、ようやく鎮圧されたのだそうです。その際、軍は南化郷や玉井郷の村民が叛乱に加わったと疑い、周辺の村々を焼き払いました。その際、壮丁を中心に数千人の犠牲者が出たとの噂ですが、詳細は不明です。その後、一帯は「寡婦村」と呼ばれるようになったとのことです。

1910 年生まれの幼い父は、1875 年生まれの祖父に背負われて裏山の断崖絶壁の岩窟に逃げ込み、危うく難を逃れたのだそうです。この事件では、まず首謀者の余清芳と羅俊を始め、1900 人余りが捕えられて 1500 人近くが起訴され、死刑宣告が 866 人、有期徒刑が 453 人という空前の受刑者を出しました。しかし、世論と国会の厳しい批判を受け、台湾総督府は、大正天皇即位の恩赦令により無期懲役への減刑処分を余儀なくされました。ただし、事件の犠牲者と同数の 95 人の死刑が執行された後でした。

一方、江定とその一派は、余清芳らと別れて山中に潜伏していました。翌年の 4 月 16 日、江定は逃亡に疲れて投降勧告を受け入れ、ついに逮捕されてしまいました。江定が投降したという報せを聞いた他の山中で逃亡生活を送っていた者も覚悟を決め、捜索隊の下に投降しました。結局、江定を始め、272 名が逮捕されましたが、有期徒刑が 14 名、死刑宣告が 37 名の判決が下されました。恩赦は適用されず、9 月 13 日、37 名が絞首台の露と消えました。ここに、叛乱発生後、10 ヵ月近くに及んだ漢族と平埔族による台湾統治史上最大の抗日事件は幕を下ろしたのでした。

このような悲劇の舞台となった南化郷でしたが、清朝統治下の 1868 年頃には、既に英国長老派教会から派遣された宣教師が巡回伝道を行って布教活動を行っておりました。その際、洗礼を受けた祖父は自己の信仰に基づき、南化公学校を卒業した父を台南の英国長老教会の経営する私立の長栄中学に進学させました。しかし、農家を継がせるため、途中で新設の新化公立農業補習学校（＊三年制）に転校させたのです。

1928 年 3 月、父は同校を優秀な成績で卒業し、地元の南化産業組合に就職しました。早速能力を発揮して上司の信頼を得、幹部として大きく期待されたのだそうです。そして、10 年後には優秀組合員に選ばれ、内地の産業組合視察団の台南州代表として九州、関西、関東各地の模範的な産業組合や近代的な各種施設を見学しました。天長節には、代々木練兵場に招待されて、白馬に跨った天皇陛下の閲兵式を仰ぎましたが、遺された日誌には感動の文章が達筆で綴られております。

帰台後は、日本各地で学んだ事柄を参考にして産業組合の経営改革に力を注ぎ、大きな成果を上げて高い評価を受けました。戦後、南化産業組合は「南化農会」として

改組され、総幹事として職務に励んで郷民代表にも数回選出され、郷里の功労者として指導的な役割を果たしたのです。

父は剛毅な性格で、車道もなく未だ電燈も来ていない寒村の我が家から、勤務先の南化まで一時間ほどの道程を真夏の炎天や風雨をものともせず、デコボコの山道を歩き続け、40 年間無遅刻無欠勤で通したのです。

当時、村で初めて中等教育を受けた父は、勉強好きで早稲田通信講座を受講し、農業雑誌の『家の光』や総合雑誌の『現代』の購読を欠かさず、常に新しい知識を補充しておりました。特に、会計事務には精通し、書道や文筆にも秀でていました。

さらに、専門の農業方面では果実の栽培と接木技術に長けており、少ない蓄えの中から副業と質素倹約に励みました。遂には 20 甲歩（＊1 甲歩≒1 ヘクタール）の果樹園と農地を所有して台湾特産の竜眼、パイナップル、バナナ、柑橘類や蔬菜を栽培し、私への学費や生活費の仕送りを続けてくれていたのです。

父は内柔外剛で、私に対する躾は日本式でしたが、厳しくもあり、時には優しくもありました。私には、新奇の珍しい玩具や動物の玩具、また動く人形などの面白い新製品を買ってくれ、好奇心を呼び起こさせてくれました。そして、少年雑誌などを惜しげもなく買い与えてくれるなど、情操教育にも気を配ってくれたのです。立派で心優しい父親でしたが、惜しくも定年退職後の 1986 年 12 月に、77 歳で静かに生涯を終えました。

母は、当時の女性としては珍しく、木柵公学校を卒業しております。私が台南から帰省する度に、美味しくて栄養豊富な料理を作ってご馳走してくれました。そして、台南に帰る時には、そっとポケットに小遣銭を入れてくれるのです。敬虔なクリスチャンである母は、長老教会の長老職を務めて模範的な女性として表彰され、いつも信徒や家族の安寧を祈っておりました。毎日、聖書の言葉に従って信仰の生活を送っていましたが、2002 年 1 月に 95 歳で天に召されました。

私は、7 歳で南化公学校に入学しましたが、クラスでは最年少でした。片道 1 時間半以上掛かるので、朝礼に間に合わせるために、毎日薄暗い朝靄の中を村の上級生に引率され、雨の日も風の日も欠かさず登校しました。

子供の頃は、自分がシラヤ族の末裔ということは知らず、ただ、自分は他の漢族とはどこか違うとだけ感じておりました。それは、祖母の言葉に他の漢族のおばあさんとは違う訛りがあり、また台湾語で賛美歌を歌うのですが、それが台湾語のメロディーとは明らかに違っていたのです。公学校の入学の時、祖父に墓地を案内され、先祖の墓だと教えられて拝礼させられたのですが、その墓が他の漢族の墓とは違っていたのです。食事も、漢族のように豚肉だけでなく、よく猪や鹿の肉を食べていたことが思い出されます。

祖母は、漢族のおばあさんたちとは違って纏足をせず、いつも頭に黒い頭巾をター

バンのように巻いておりました。祖母の他にも、何人かの近所のおばあさんも黒い頭巾を頭に巻いていたのです。改姓名の時、祖母は頭に頭巾を巻いていましたが、祖父に「日本人に馬鹿にされるから取りなさい」と言われ、それ以来頭巾を巻くのは止めています。

また、同級生と喧嘩をした時、相手から「蕃人」と罵られたことがありました。当時は「蕃人」という言葉の意味さえ知らなかったのですが、「何で、そんなことを言うのか」と糺したところ、「お母さんが、お前の家は蕃人だと言ってた」と吐いたのです。それで、自分は他の漢族とは違うということは知っていたのですが、当時は、一視同仁で、自分は日本人だと思っていましたから、台湾人だろうが蕃人だろうが関係ないと深く考えずにおりました。

祖父や祖母は、自分たちがシラヤ族の末裔だということは知っていたのでしょうが、シラヤ語は知らず、シラヤ語の名前もありませんでした。おそらく、何代か前の先祖から漢族に同化してしまったのだと思います。ただ、家の木の下に小さな地蔵さんみたいなのがあり、幾つかの壺がありました。後で判ったのですが、シラヤ族には水を湛えた壺に「太祖」という神が宿り、その壺を祭壇に祀るという習慣があったのだそうです。ただ、私の祖父は、キリスト教に改宗していましたから、シラヤ族の祭祀は止めてしまっていたのでしょう。

現在では、壺を祀る習俗も消え、シラヤ語を話す人もほとんどいなくなってしまいました。ただ、最近は自分のルーツを探すのが流行っていて、シラヤ族の末裔たちがシラヤの祭祀や踊りを復活させて、民族意識の高揚に努めるようになりました。実際、私がシラヤ族であることを確信したのは、50歳を過ぎて自分の先祖に関心を持ち始め、内外の様々な文献を渉猟し、祖父の兄の戸籍の氏名欄の下に平埔族を意味する「熟蕃」の「熟」の字が書かれていたのを確認してからのことです。

公学校に入学した当時、台湾は皇民化運動の最中で、一年生の時から日本精神を叩き込まれていました。昭和12年に、支那事変が起こり、田舎の学校でただ一人の内地人の先生も召集され、在郷軍人の軍服に伍長の肩章と奉公袋を提げて出征して行きました。二年生の時でしたが、全校の生徒が道路を挟んで両側に並び、その間を健気に出征して行った先生を、日の丸の旗を振りながら、出征兵士を見送る歌を歌って先生の後姿が見えなくなるまで見送った日の光景は、今でも鮮やかに脳裏に浮かんできます。

父は、常に教育の重要性を認識していて、先見性に優れておりました。七歳で郷里の公学校に入学した私を十歳の時に、「可愛い子には旅をさせよ」と、一人親元から切り離し、台南市内の名門校でレベルの高い「末広公学校」の三年生に転校させ、恵まれた環境で教育を受ける機会を与えてくれました。

親元を離れた寄宿舎の生活は寂しくてホームシックに罹り、悪餓鬼どもに「田舎っ

ぺ」と苛められました。狡賢い餓鬼大将は、苛めの原因を私に転嫁し、先生も有力者の子である餓鬼大将の話を鵜呑みにして、私の操行を「丙」にしたのです。孤立無援の私は悔しくて、故郷の空を眺めて親のことを思い、涙をポロポロと流しました。

厳しかった父でしたが、私の苦衷を察して「山の子は、人一倍努力して成績を上げ、体を鍛えて強くなったら馬鹿にされない。強い男の子になれ！」と励ましてくれました。この苦い体験と試練が後日教師になった時、児童教育に役立ち、子供の喧嘩の対応では慎重かつ公平に処理することになりました。

末広公学校は、設備が充実していて先生の素質も優れ、米田校長の下で、精神教育が厳しく行なわれ、傑出した先輩が数多く出て各界で活躍しておりました。校門の左右に並んだ、馬に乗った楠木正成公と薪を背にして本を読んでいる二宮尊徳の二つの銅像は、忠君愛国と勤勉節約のシンボルでした。整然と立ち並ぶ校舎の間には、美しい花壇と噴水がありました。

三つ葉入りの五つの金ボタンを付けた黒の制服と半ズボン、三本の赤筋に三つ葉に校名入りの金色の帽章を付けた制帽を被って黒い靴を履き、父に買ってもらったランドセルを背負って登校しておりました。毎朝、服装検査があり、ハンカチ、チリ紙などは必ず揃えさせられました。

夏休みと正月の休みだけしか帰省出来ませんでしたが、苛めの屈辱を忍び、耐え難い幾多の試練を乗り越え、学力も向上しました。水泳が得意でしたが陸上選手にも選ばれて、同級生にも一目置かれるようになりました。一方、苛めっ子の餓鬼大将は成績が振るわず、その上登校拒否でかつての威勢はなくなり、卒業まで先生のお荷物になっておりました。

五年生の頃に、「岡本光麿」と改姓名しましたが、当時は自分のことを日本人と思っていたので、抵抗はありませんでした。ただ、父は名前を変えるのには抵抗があったらしく、産業組合に勤めている関係上、止むを得なかったとのことでした。

学校では、毎日午前の 10 時から約 20 分間、白いランニングにパンツ、頭には赤い鉢巻を締めて隊形を取り、歩け歩けのレコードに合わせ、行進の訓練が欠かさず行われておりました。戦時用語も沢山出回り、「米英撃滅」、「撃ちてし止まん」、「滅私奉公」、「進め一億火の玉だ！」などのスローガンが無邪気な私の心の底まで浸み込んだのでした。

昭和 18 年、公学校から国民学校へと改称した末広国民学校を卒業しました。私は工業学校へ行きたかったのですが、父が農業学校か商業学校に行けと言うので、台南商業学校の試験を受けました。10 倍以上の競争率でしたので、無理かなと思っていたのですが、幸いにも合格して入学することが出来ました。台南商業では、学生服に徽章の付いた二本の白線入りの学生帽を被っておりました。脚には、ゲートルを巻いて編上げ靴を履き、ズックの肩掛けカバンを提げて通学していました。ただ、時計は

持っていませんでした。

当時、台南市には台南商業の他にも中等学校が幾つかありました。商業学校の生徒は台南一中や長栄中学の生徒と仲が悪く、通学の途中で出会うとよく喧嘩をしておりました。通学の途中で、一中の内地人の生徒から「チャンコロ！」と罵られるので、私たちも「イヌ！」と言い返すのです。すると、喧嘩が始まるのですが、ルールがあって一対一でやることになっていました。それで、喧嘩の強い上級生が出て行って、相手の内地人の生徒を「参った！」と言うまで叩きのめすのです。ただ、同じ商業学校の内地人の生徒と喧嘩をすることはほとんどなく、普段は仲良く付き合っておりました。

先生方も、公平に教えてくれました。ただ、一年の頃、級友が英語の文章にカタカナで振り仮名を付けていましたが、それが先生に見付かったことがありました。その際、虫の居所が悪かったのか、「このチャンコロ！」と吐き捨て、竹刀で頭を叩いたのでした。

軍事教練の教官に、近衛師団出身の関口少尉がおりました。頑健な体格でしたが、一般の軍人とは違って威張ることはありませんでした。ある日、上級生同士が喧嘩をしたのですが、少尉は、朝礼で壇上に上り、二度とこのような喧嘩はせぬようにと懇々と諭した後、「これは自分の教育が至らなかったからだ。この上は自分が責任を取る」と言って、戦闘帽を脱ぎ、号令台の角に頭をゴツンとぶつけたのでした。少尉の頭の盛り上がった瘤を見て、私たちは少尉の愛の教育に心を打たれ、粛然と頭を垂れたのでした。

当時、戦局は既に敗戦の道を辿っており、相次ぐ航空戦で戦闘機が足りなくなり、航空兵力の増強と戦闘機の増産が叫ばれておりました。学校では総督府の要請を受け、生徒たちに「決戦の大空」や「飛行機組み立て」の映画を観覧させ、航空兵学校や戦闘機を生産する海軍の高座工廠への志願を呼び掛けていました。高座工廠の工員になれば、海軍軍属の名目で衣食住の全てが官費で賄われ、月給も支給されて甲種工業学校の資格も取ることが出来るという触れ込みでした。

私は同級生が応募しているのを見て、親の承諾を得ずに、早速志願書を書いて提出しました。父は、必死で引き止めようとしましたが、私は「天皇陛下のために尽くしたい」と強情を張って意志を貫徹したのでした。当時は完全な軍国少年だったのです。学校では、朝礼で私たち三人の壮行会を開いてくれました。校長から「台南商業の名誉のためガンバレ！」と激励された後、台南商業のバッジを記念品として贈られました。

昭和19年の五月、基隆から浅間丸に乗船し、潜水艦攻撃の危険を冒して神戸に着きました。下船して列車を乗り継ぎ、辿り着いたのが神奈川県大和の海軍高座工廠の台湾少年工専用の宿舎でした。既に、戦局は極めて不利に傾いていましたが、国民の

総力で形勢を挽回しようと、航空機の増産と軍隊の増強に邁進しておりました。

木村寮長は、艦船勤務帰りの一等工員でした。「全員起床！」の声で飛び起き、掛毛布を丁寧に畳んで押し入れに片付け、服装を正して寝室の廊下に整列し、点呼を受けるのです。一人でも遅れると全員制裁で、腕立て伏せや対向ビンタが待っていました。

浜辺に出て、海軍体操や、輪になって大声で軍歌の「艦船勤務」や「四面海なる帝国を守る軍人は」をよく歌っていました。夜は二時間交替の不寝番でした。時々、寮の廊下の板がピカピカになるまで雑巾掛けをさせられ、窓枠や戸棚、手すりまで拭かされました。もし、寮長が触ってザラザラしていると、直ちに鉄拳制裁を喰らいました。

技術志望の夢を賭けて来た内地で、海軍軍人並みの鉄拳制裁を喰らう度に、遠い台湾の優しい母の顔が浮かんだものでした。唯一の楽しみは、寮友とともに休暇を利用して鎌倉の大仏を見物したり、江ノ島海岸の橋から富士山を眺めたりして互いに慰めあうことでした。

工廠での仕事は厳しかったのですが、街の人は親切な人が多いという印象を受けました。台湾では、内地人から見下げられて自分たちは二等国民だと思っていましたが、内地の生活では差別は全然感じられませんでした。

この海軍航空技術廠で、極秘特攻兵器の「桜花」が製作されていたのです。桜花は、艦船攻撃用の人間爆弾搭載の攻撃機でした。親航空機に吊り下げられて敵艦の至近距離まで近付いて発射されるのです。私たちは、吊り下げの部分を溶接で造るのを受け持ったのでした。

試作機完成後、勅使と特攻隊員の代表が訪れて来ました。絹の茶褐色の特攻隊用飛行服を着て、白い絹のマフラーに日の丸の鉢巻を締めた若い士官と紅顔の下士官が、作業中の皆の前で直立不動の姿勢を取り、「皆様、ご苦労様です。今から敵撃滅に行ってまいります」と、右手を上げて海軍式の敬礼をしておりました。去っていく二人の姿を工場の全員が立ち上がり、手を振って見送ったのでした。同じ年頃の少年の花と散り行く姿に、私は涙ながらに靖国神社で逢おうと誓ったのです。

昭和20年三月、硫黄島の守備隊の全滅を受け、海軍は桜花を特攻専用の兵器として沖縄へ向かわせたのでした。一式陸攻に抱かれた桜花は次から次へと飛び立って行きました。また、新式のロケット戦闘機「秋水」が造られ、テスト飛行を繰り返していましたが、前線に投入される前に終戦を迎えてしまいました。

昭和二十一年の一月、浦賀港を出港して、浮遊機雷を避けながら無事基隆に着き、何とか家に辿り着きました。一人息子が生きて帰って来たので、祖父や両親は狂喜して迎えてくれました。戦後の台湾では、実に色々なことがありました。師範学校入学、二・二八事件、教師生活、日本への留学、就職、起業、倒産、また起業と、文字通り

七転び八起きの人生でしたが、子供たちにも恵まれ、今は八十の坂を越えて悠々自適の毎日です。

〈続〉